

これからの国立大学が地域に果たす役割について 公立文化施設と芸術文化支援活動の一考察 ——舞踊を中心として——

駒沢大学仏教経済研究所 薩佐久仁子

はじめに

この数年の経済環境を取り巻く状況は厳しい。国立大学が「地域アイデンティティ」の確立に果たしてきた役割は小さくないが、今従来の枠を越えた国立大学の独立行政法人化でこの特性が失われようとしている。これでは国立大学の存在基盤の柱の一つが無くなってしまふ可能性がある。この状況の中で生き残るには、郷土舞踊の果たす役割は無視できないのではないか。その意味で地域アイデンティティに舞踊が果たす役割と地域密着型或いは地域に貢献する国立大学の生き残りを懸けた存続は重要である。本研究はその一つの解決策の紹介（第23回小金井阿波踊り大会国立東京学芸大学初参加2001年7月27/28日）と、今後の大学改革を見据えこれからの地域文化の発展と国立大学の模索する姿を中心にして考察してみたい。

本論

まず始めに日本の都市とヨーロッパの都市との比較研究からアーバニティの特質について論じてみたい。高崎・群馬・首都圏の多重的關係は、近代都市の機能は基本的には変化が無いが、そこに人間が住み、生活している限りその形態は質的に大きな変化を遂げてきた。その質の変化を「行政の介入で快適な都市生活を人為的に作りだすよりも『首都圏第三層』まで含めてアーバニズムの自然な発展がみられることに注目したい。」¹⁾とした武井の視点は高く評価できよう。では東京圏型アーバニズムや首都圏型アーバニズムの中心はどこかであるが、「見えない都市」に経済都市がシフトし情報都市は、「逆都市化」現象が起こる可能性が高い。それは東京都が抱える国会議事堂の移転問題の是非論の前に「逆都市化」が進み、電子時代には「逆都市化」が加速することを避けられない状況にある。更にヨーロッパ型アーバニズムは、人間らしい日常の生活を送ることと経済都市の発展を天秤に掛けたときに、生活を犠牲にする程度を最小限度に抑えることの中で最適な道を選んだが、アメリカや日本は経済都市としての機能を最優先したのである。次に小金井市の阿波踊り大会の持つ意義について考えることにしよう。小金井市は学園都市で東京学芸大学とその附属幼稚園、小・中学校の他、隣駅には東京農工大学・東京経済大学があり武蔵野の雑木林や小金井公園・玉川上水・野川の自然が点在し、JR武蔵小金井駅～新宿駅間の所要時間は20分～30分で通勤

圏という生活圏も内含し、首都圏型アーバニズムで考察するには最適な環境と機能を備えていよう。だから小金井市は「逆都市化」が高いが市のアーバニズムの回復には阿波踊りのもつルーラリズム・地域アイデンティティの高揚が必要で、国立東京学芸大学がその中心になる必要が不可欠である。次に情報化が今何を都市機能にもたらすかを考察したい。文化と国家が内在する諸問題としては歴史的考察を武井は1970年を境にして脱工業化時代＝ポスト・モダンの時代に突入したとし、情報化時代の芸術文化とその支援活動の視点の欠如などはボウモルら²⁾の研究の日本での検証を待つのだが、IT後進国の我が国は本来の芸術に内在する真善美聖や感動に立ち戻るであろう。つまり肉体の表現である舞踊は芸術（アート）の原点であるからだ。コピー芸術やライブの意味の検証等は著作権やプライバシーの問題等の変革を迫られている。これを「舞踊環境」と捉える。我が国は今まさに舞踊環境の基盤作りに真剣に取り組む時が来ているのである。

まとめ

阿波踊りのような大衆舞踊が地域アイデンティティ（郷土意識）の涵養に役立つと思われるため、各地でこうしたイベントが行われる。東京のような巨大都市では地域アイデンティティが得られないため、公共施設（国立大学）の活用が不振に陥り存続すら危うい。江戸時代までの「江戸」と明治以降の「東京」の最大の違いはこの地域アイデンティティの欠落にある。これを欠落している、アートの発展は望みえない。いよいよ追い詰められてはいるが、巨大都市であってもこのアイデンティティが得られないことはない。アーバニズムとはこのアイデンティティが得られる形の開発をした都市生活のことをいう。東京圏でのアーバニズムの確立をめざすとともにさらにその範囲を拡大して首都圏でのアーバニズムの確立をも視野に入れる時がきている。その折りに、大衆舞踊の普及の形態をとることで舞踊環境が築かれる可能性もあることを忘れてはならないであろう。ここに国立大学の活性化の源もあるといえよう。

参考文献

- 1) 武井昭稿「近代都市の機能と形態の変動について（3）——社会経済的側面からのアプローチ——」、高崎経済大学産業研究所、『産業研究』第37巻第1号、2001. p. 34
- 2) ウィリアム・J・ボウモル&ウィリアム・G・ボウエン『舞台芸術 芸術と経済のジレンマ』、池上惇・渡辺守章監訳、芸団協、1994.